



聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

イエスの憐れみにすべての人がより頼むように

「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」ペトロは、「違う」と言った。ペトロははっきりと、イエスとの関係を否定しました。マタイ福音書によると、彼は直前まで「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」(26・33)「たとえ、御一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」(26・35)と言っていたのです。それなのに、「わたしはイエスを知らない」と言ったのです。

ペトロが「違う。わたしはイエスの弟子ではない」と言ったことは、その言葉だけでしたら、ゆるされるかもしれませんが、けれども、言葉の意味している内容は、もっと深刻なのではないでしょうか。

イエスはいつも、希望のない人に希望を与える人でした。場合によっては、命をよみがえらせて絶望の淵にある人に希望を与えました。ですから、「わたしはイエスの弟子ではない」と言った時、それは「わたしはイエスに希望を置いていない」と言っているようなものなのです。これまで目にしてきたイエスの姿を、完全に否定したことになるのです。

ペトロが事の重大さを分かっていたかは分かりませんが、結果的に彼はイエスの予言の通り、鶏が鳴く前に三度イエスを否定したのでした。三度、希望を与え続けてきたイエスを否定したのでした。

ペトロの罪は、ペトロだけの罪ではないと思います。大事な場面で責任から逃げ出してしまう弱さや、自分が助かりたいために人を蹴落とす醜さは、どんな人にも隠れています。ペトロと同じ場面に立たされたとき、わたしたちも同じ過ちを犯してしまうのです。

だからこそイエスは、すべての人の罪を背負って、十字架にはりつけにされました。「決してつまずきません」「知らないとは決して申しません」と言ってそれでも裏切ったペトロの罪も、「引き渡したらいくらくれますか」と言って自ら進んで裏切ったイスカリオテのユダの罪も、イエスは背負ってくださったのです。

弱さや醜さのために、背を向けてしまう人間をイエスは憐れに思い、いのちを投げ出して救ってくださいました。問題はその後です。弱さや醜さを認めてイエスに憐れみを願う。わたしたちを救ってくださる主に哀れな姿をさらけ出して感謝する。そこに一人ひとりが向かっていく必要があります。どんなに弱くみじめでも、絶望してはならないのです。

「決して裏切らない」と言ったペトロさえ、イエスにとどまることができませんでした。わたしたちは一人残らず、イエスの憐れみによってしか救われないことを認める必要があります。この後に続く十字架の礼拝では、すべてを委ね、救いのわざに感謝しますと態度に表わしましょう。一人ひとり十字架の前で動きを止めて、礼拝いたしましょう。